

パウル・フレーミンクと波斯旅行

内山貞三郎

I

Martin Opitz (1597-1639) の生涯は 17 世紀前半における所謂市民的宮廷的詩人 (der bürgerlich-höfische Lyriker) の運命を典型的に代表していると云うことが出来るし、その詩論 *Buch von der deutschen Poeterey* (1624) はバロック時代のドイツ詩壇に測り知る事の出来ない程、強力にして広汎な影響を及ぼした。勿論この時代の戦乱と疫病の悲惨な災禍のためには、ドイツ文学も後退し逃避せざるをえなかったけれども、それ丈にまた苟も文筆に志のあるものは、戦禍の合間合間を縫うて安住の地を求め、行く先き先きで自らに課せられた時代的又は個人的要請を一層忠実に果そうと苦悩しつつあったのである。

既に世紀の始め、Die Rheinpfalz 領の農民の子として生れ乍ら、遠くポヘミヤへ走り、Peter Wok V. von Rosenberg に奉仕 (Seit 1600) し叙爵書まで授けられたが、三十年戦役の勃発するや、宗敵に迫害されて消息を絶った Theobald Hock (Hoeck, 1575, 8, 10—?) は、一巻の詩集 *Schoenes Blumenfeld* (1601, zu Liegnitz erschien) を残すことによって、シュレーゲン文壇のため市民的宮廷的詩人としての先駆的役割を演じているが、次いで Stuttgart の官吏の子で Württemberg 宮廷の秘書官 (seit 1615) から、英国チャールス一世の親任 (seit 1620) を得て、遂に外務長官 (seit 1643) となり赫々たる名声を博してロンドンで没した Georg Rudolf Weckerlin (1584, 9, 15—1652, 2, 13) は、二巻の詩集 *Das erste Buch Oden und Gesänge* (1618) と *Das ander Buch Oden und Gesänge* (1619) によって、自国語の新しい創作抒情詩を世に問い、正にオーピツのための開拓者的役割を果たしたのであった。更らにオーピツの終焉の地ダンツィヒから程遠からぬケーニヒスベルクで、オーピツを偉大な師表と仰いだ Kürbs-Hütte (Kürbshütte) の中心的抒情詩人 Simon Dach (1605, 7, 29, geb. zu

Memel in Ostpreußen—1659, 4, 15) は、漸く戦乱の圏外にあったこの東北辺陲の文化都市で、現世苦とそれからの救済、死に対する憧憬と歓喜とを歌いあげ、告白詩の作者として、ドイツ抒情詩史上最初の頁を飾るものとなった。同時にオーピツと同郷でシュレージエンの Brockutt bei Nimp-tsch に所領地を持った地方貴族階級の出身で、終生 Brieg-Liegnitz の宮廷に仕え、この宮廷と運命をともした Friedrich von Logau (1604, 6—1655, 7, 24) は、三千五百有余篇の警句詩 (Epigrammata od. Sinngedichte) を詩作し、後世レッシングをして、「オーピツの流れを汲む秀れた詩人の一人」と歎賞せしめ (Vgl. Lessings Literaturbriefe 36, 43, 44), ゴットフリート・ケラーにまで大きな感銘を与えているのである。

然し乍らシモン・ダッハにしるフリードリヒ・フォン・ローガウにしる、オーピツの忠実な使徒でありながら、何れもそれぞれの環境と個性に従ってこの時代に対決したのであって、彼等の詩境には共通した時代的特色とともに、又それぞれ独自にして異色ある世界が展開していて、17世紀前半のドイツ文学史を豊かに清純に飾っているのである。そして同じ意味で、同じく動乱の激浪の中から遙かにオーピツの偉業を仰ぎ見ながら、おのれが生きるための詩の世界を求め、遠い東方の旅へのぼった Paul Fleming の生涯と詩業も亦ドイツ・バロック抒情詩史上見逃し得ない高貴にして芳醇な宝庫である。

フレーミンクはダッハのように、善良にして気高く、敬虔にして信心深い新教徒であった。その出生地は遠く離れていたとは云え、二人とも天性の抒情詩人として高い才能を恵まれていた。二人は殆んど同年輩で、同じような普通教育を受け、同じような時代的教養を身につけ、音楽を愛し音楽を嗜み、オーピツから大きな影響を受けてラテン語の詩作からドイツ語の詩作に目醒め、同志の友人達の厚い友情によって激励され支持され尊敬された。更らに二人ともラテン語にしるドイツ語にしる、宛も水の低きにつく如く、自然に自在に見事な諧調をなして流れ出る抒情の源泉を恵まれていた。

だがダッハは本来意志の人であるより情感の人であった。生れ乍らに授かっていた秀れた才能も苦学力行悪戦苦闘の中に鍛錬されたとは云い、生活意欲を強化するよりも寧ろ彼の素朴にして温和な性情を愈々敏感にする

のに役立った。彼は戦乱と荒廃、疫病と死とに脅かされたのみならず、虚弱な体質と職務上の煩雑な仕事とも戦わなければならなかった。その上彼がどのように自由な天地を求めても、所詮ドイツ東北隅の狭隘な世界に繋がれて、地方的人情風俗の中に閉鎖されざるをえなかった。だから彼が只管自らの安住の地を死の世界に求め、現実を超越した神の世界へ逃避することを願ったとしても、それは当然のことであって、一度彼がそのような胸中の衷情を吐露する時は、荒野に呼ばわる予言者の声の如く、側々として人の肺腑を打つものがある。かくて彼は正しく三十年戦役時代の市民的感情を最も自然に誠実に代弁する告白詩の作家となった。

これに反して、フレーミンクやローガウは戦乱や病苦や恋愛において屢々絶望し乍らも、決してそれに屈伏しなかった。二人とも自己自身を支える強靱な信念、智識人として又は貴族としての自己矜持を抱いていた。とは言えローガウも亦ダッハと等しく、自らの夢を自らの心の奥深く描くより他に道がなかった。最も戦禍の大きかったシュレージエンの宮廷に依存せざるをえなかった貧困弱小の地方小貴族ローガウは、栄枯衰盛常ならぬ宮廷生活や煩雑過重の職務に誠実に奉仕しただけに、その同じ誠実な心は、一日の勤務が終った後夜の一刻その日のくさぐさの感想や感懐を流れ出るままに簡潔卒直に或は辛辣鋭利に或は輕妙洒脱に歌っていった。かくてドイツ文学史上稀れに見る卓越した警句詩人が生れたのである。

だが然しフレーミンクはダッハやローガウのように、郷土の小天地に捕われてはいなかった。彼は自らの欲するところに従って自由に驥足を延すことが出来た。彼は財産や地位や名誉に煩わされることを努めて避けた。従って彼は富裕な良家の子弟として、その奔放自在な才能を思う存分に發揮するに至った。彼は宮廷や恩人に感謝はしたが、自ら屈従し自らを曲げることをしなかった。彼は生涯自由にして独立した地位を保持し、自らの責任において行動することを誇りとした。かくて彼はこの時代には異例とも云うべき「生の詩人」(Vgl. Kürschner: Deutsche National-Literatur, 28. B. S. 10.)となった。

もとよりフレーミンクにしても、当時の殆んど凡ての詩人に共通している世の無常観を繰返し繰返し力強く歌ってはいるが、然し彼はその数奇な生涯において体験した幻滅や失意を通じて絶えず反省し諦観し、遂に

独自の悟道に達したのであって、彼の抒情詩は正しくこのような光明を求めて苦悶するドイツ精神の悲痛な歌声として、今日なお不朽の生命に輝いているのである。

II

Paul Fleming は1609年10月5日ザックセンの Hartenstein (Zwickau の東南) の新教牧師 Abraham Fleming の長男として生れ、少年時代から秀才の誉れ高く、ライプツィヒの有名校 Thomasschule を経て、ライプツィヒ大学 (1626—1633) で哲学を専攻、傍ら文学と医学を学んだ。

当時ライプツィヒ市は Halle からシュレーゲンへ通ずる街道と、ニュルンベルクからポーランドへ通ずる大道との交差点にあり、既に14世紀以来見本市都市として明るい経済的活力が汪溢していたが、又同時に1409年に出来た大学を中心として、若い新進気鋭の学徒を吸収して、新しいルネッサンス文化の最先端に立っていた。さればここでオーピツの斬新な文学理論とその実践が熱狂的歓迎を受けたのは当然のことであった。ことにオーピツの同郷人で友人であり、自らも新風の詩を作った医学生 Georg Gloger aus Habelschwerdt (1603-1931) を始めとして、Gottfried Wilhelms aus Hirschberg, Martin Christenius aus Jägerndorf 等所謂ザックセンのシュレーゲン文壇 (Sächsisch-Schlesische Dichterschule) と云われる人達が、Schäferorden なる文学同好会を作って、伊太利風の明るい牧歌調の作詩を推賞したことは、この商工業兼大学都市の性格、即ち一面野性的ではあるが果敢な進取の気性と、他面楽天的生の享樂と自由な市民的英知とを反映しているものと云うことが出来る。

だから勿論フレーミンクも彼等の同志として、ラテン語で恋愛友情酒宴等を歌った牧歌的歌謡調の多くの即興詩を作り、先輩友人の間にその詩才を高く評価されていたが、やがて前記 Gloger によってオーピツの作品や詩論を教えられ、1630年オーピツがライプツィヒに立ち寄った時、親しく紹介されるに至って、彼の受けた感動と感謝は異常なものであった。彼の詩風はこの時から一変したと云っても過言ではない。特に彼を感激せしめたのは、オーピツの持論である、ドイツ語をもってしてもラテン語イタリ

一語フランス語に劣らず偉大な思想や感情を歌うことが出来ると云うこと、又詩人の使命は身分や財産の如何にかかわらず、王侯貴族にも増さる權威と名譽に値するものであると云うことであった。彼がオーピツに如何に深く傾倒していたかは、後年彼がペルシャ旅行の途中オーピツの死が誤り伝えられた時、追悼のソネット四篇 *Auf Herrn Martin Opitzen seinen Tod, welcher ihm in der nagaischen Tartarei kund getan ward.* (1638, Juni) を詩作し、その中でオーピツを *Herzog meiner Lust, Herzog deutscher Saiten, du Pindar, du Homer, du Maro unsrer Zeiten etc.* と筆を極めてその功績を歎賞していることによっても知られる。さればオーピツとの巡り合いによって、彼は先づ何よりもラテン語による詩作からドイツ語による詩作へと移行する十分な自信を得たものと思われる。

然し乍ら時勢は必ずしも彼を好遇しなかった。成程彼は地方詩人として1603年 *Poeta Laureatus* に叙せられたけれども、当時智識人の仰望していた *Die fruchtbringende Gesellschaft* は一地方からあげる彼の歌声に何等耳を貸さず、ドレーズデンの宮廷も彼に何等の顧慮を払ってくれない。その上彼の愛人はペスト病で1630年夭折した。

更らに悪いことには、1630年以来瑞典王 *Gustav Adolf* の侵入によって、戦乱はまたもやザックセン地方に波及して来た。しかも彼はこの王こそドイツの解放者、新教徒の擁護者であると信じ、満腔の期待をかけていたのであるが、そのアドルフ王も1632年11月16日 *Lützen* の戦で敢無く戦歿した。彼の失望は大きかった。されば1633年8月大学の恩師 *Adam Olearius* (1599-1671) が彼を、*Herzog Friedrich III. von Schleswig-Gottorp* を総裁とする波斯貿易使節団の団員に推薦した時、彼は欣然として之に参加する決意をするに至った。そして正しくこの決断とその果敢な実行こそは、フレーミンクの創作活動に一大脱皮を齎すものとなったのである。

III

抑々波斯及び印度との貿易は土耳其によって陸路を遮断され、葡萄牙、次いで和蘭英国によって希望峰廻りの海路を独占され、更らにハンザ同盟が全く衰微して以来、ドイツでは殆んどその道をたたれていた。従って新

たに陸路露西亜を経て印度に達しようとする計画は、欧州大陸内の諸国にとって最大の関心事であった。そこでハンザ都市ハムブルクの材木商 Otto Brüggemann なるものが、Holstein 侯 Friedrich III. を勧説した後、1632年 Moskau に行き、ドイツから露国を經由して波斯へ貿易使節団を派遣する件に関して、露帝 Michael Feodorowitz から好意ある了解を獲得して来た。然るに瑞典もまた同様な計画を大規模に立てていたので、ブリュッゲマンは1633年 Halle に滞在していた瑞典の総司令官兼宰相 Axel Oxenstierna と交渉して、この事業に関する協定を結び、7月6日ストックホルムで調印した。こうしてホルシュタイン侯の後援で使節団が結成されることになったが、始め団員の総数34名（後には124名にのぼった）、これ迄準備交渉に協力していた法学者 Philipp Crusius aus Eisleben が団長に、オットー・ブリュッゲマンが副団長に任命され、クルージュスの推薦で Adam Olearius が秘書官に、オレアーリウスの推薦でパウル・フレーミンクが四人の侍従兼内膳頭 (Hofjunker und Truchsessen) の中の一人に採用された。

さて使節団一行は先づ露領内通行の許可を得るため、1633年11月6日ハムブルクを発し、9日に Travemünde から乗船してモスカウに向った。フレーミンクは一行とともに11月14日 Riga に到着、ここに約1ヶ月余滞在した後、12月23日 Dorpat に到着、更らにここを29日に発して翌34年1月3日 Narva に到達した。だがナルヴァで瑞典の使節団を待つこととなり、ここに5ヶ月以上滞在、その間フレーミンクは先発隊の一員として2月28日露西亜領の Naugarten (Nowgorod) に派遣された。そのため彼はナルヴァでゆっくり詩作したり研究したりすることが出来ると斯待していたのも空しく、またもや嵐と氷雪の中を大行李を世話して艱難な旅を続けなければならなかった。漸く7月28日使節団の本隊がナオガルテンに到着し、全員モスカウに這入ったのが8月14日であった。

モスカウに滞在中フレーミンクは各種の交渉や行事や宴会で多忙であった。彼はつとめて在留ドイツ人の社交界に出入りし、特に露帝の侍医のドイツ人 Dr. Wendelin Sibelist と親交を結んだ。

モスカウに居ること4ヶ月余、漸く露国との交渉が成立し、新たに協定した条約の承認を得るために、使節団が帰路についたのが12月24日で、

翌35年1月10日 Reval まで帰って来た。しかもここで一行の首脳部10人が帰国し、他はここに残留することとなった。Olearius は帰国組に加わり、1635年4月6日 Holstein-Gottorp に帰還しているが、フレーミングは勿論残留組に加えられた。かくてこのレーヴェルから再び波斯遠征の旅に出る迄の約一年二ヶ月の期間こそ、フレーミンクの詩作生活にとって最も重要な時期となったのである。

彼は先づレーヴェルのギムナジウムの先生方、特に神学者 Reiner Brockmann 及び詩人 Timotheus Polus と親交を結び、彼等の業績や友情を歌ったのみならず、市の名門で市議員 Johann Müller とは特に別懇になり、既に2月14日同家の祝宴のため賀歌を呈している。更らにこのミュラー家を通じてハムブルク出身の商人 Heinrich Niehausen (Niehus od. Niehusen) を知ったが、この人の三人の娘 Elisabeth, Elsabe (Ilsabe), Anna の中次女エルザーベは、彼の情熱に新しい火を点じ、彼をして真の抒情の世界に目醒めさせる契機となった。エルザーベは始め彼の愛情を受け容れようとはしなかったが、後には彼に危険な長途の旅を思い止まると願った。彼はこの少女らしい配慮を自分に対する好意から発したものと解し、旅行後に全ての希望を托して、心をあとに残し乍ら波斯に向って出発したのであった。

ところで帰国した使節団首脳部は1635年10月22日再びハムブルクを出発し、27日 Travemünde で乗船、困難な長途の旅に登ったが、船は針路を誤って Öland 附近で暗礁に乗り上げたり(10月29日)、嵐に逢ってレーヴェル港外の Hochland 島に打ちあげられたり(11月8日)したので、そこから一行はまた漁船を頼んで Livland に上陸し、漸く1635年12月2日にレーヴェルに到着して、待機していた随員団と合流することが出来た。ここでさきに Öland 附近の海難で失った信任状を再交付して貰うために故国へ派遣した使者の到着を待ったり、船の難破で流出した物資を調達整備したりして、遠征隊は漸く1636年3月2日馬や櫓でレーヴェルを出発し、同月28日モスカウに這入った。

それはフレーミンクにとって万感交々去来する困窮と悲恋と郷愁と病苦と、そして欣求開悟の長旅であった。彼は一行とともに1636年6月30日モスカウを発し、小舟で Oka 河を下って Nischni-Nowgorod に着いたが、

ここで又約三週間滞在、二隻の船の出来るのを待って7月30日 Wolga 河に乗り出し、途中逆風や水位の変調などのため意外に多くの時日を費やして、9月15日漸く Astrachan に到着した。更らにアストラカンを10月12日に出帆、裏海を渡って行ったが、海上で暴風雨に逢い Darbent (Derbent) の南方百キロあたりで難破し、一行は余儀なく陸路をとって12月30日 Schamachi (Schamacha, Baku の西) に到着した。然るにここでも亦波斯王の招請状が届くのを待って三ヶ月滞在、1637年3月28日シェマハを発し、同年8月3日漸く最終目的地波斯の首都 Ispahan (Isfahan) に入都した。顧みてレーヴェルを出発してから既に一年五ヶ月、嶮しくも亦恐ろしい旅であったが、その間屢々各地で長期滞在しなければならなかったのも、オレアーリウスもフレーミンクも露西亜の文化、歴史、天文気象や露語及び波斯語を調査したり研究したりしておったと云う。ことにフレーミンクはその間絶えず美しい愛の歌、ゾネッテ、事時詩、即興詩を愛人エルザーベに送ったが、Schamachi に滞在中、愛人は Dorpat の大学教授 Salomon Matthiae と婚約したと云う悲しい報知を受取らなければならなかった。彼にとってこの失恋の打撃は大きかった。それとともに旅の困苦は彼の健康を著しく害した。

ところで波斯王 Der Schah Sefi (1629—1642) との交渉も困難を極めたが、結局波斯絹をホルシュタインで新設される貿易商會に売却することとし、詳細の取り決めは波斯から派遣される交渉委員によって、ホルシュタイン領ゴットルプで行われることとなった。かくて1637年12月21日帰路についた使節団は、途中また色々な危険に遭遇し乍ら、38年6月15日アストラカンに、翌39年1月2日モスカウに到着、更らに3月15日モスカウを出発、4月13日レーヴェル迄帰って来た。

然るに既に旅行の途中から副団長ブリュッゲマンの専横と不正を知って烈しく衝突していたオレアーリウスは、ブリュッゲマンの罪状を告発するために、ここから単独で帰国を急ぎ、4月15日ゴットルプに帰着したが、その他の団員はなお三ヶ月ここに滞在することとなった。その間団長 Philipp Crusius は Müller 家の娘 Marie と結婚し、通訳 Hans Arpenbeck、使節団付医師 Hermann Gramann などもレーヴェルの娘と結婚した。

フレーミンクはこれらの慶事に慰められるとともに、次第に失恋の苦惱

と健康の衰弱から恢復し、やがてエルザーベの代りにその妹アンナに望を托するようになった。彼はアンナに多くの恋歌を送っているが、この愛は報いられて7月8日婚約が成立した。それから三日後使節団一行はレーヴァルを発って、1639年7月30日ゴットルプに帰国した。なおそれから一週間後には露西亞及び波斯からの使節団も到着した。

ゴットルプに帰ったフレーミンクは8月ホルシュタイン侯フリードリヒ三世に拝謁し、9月に和蘭のライデンに行き、そこの医科大学で1640年1月22日医学の学位を取った。彼は医師の資格をとってアンナと結婚し、レーヴァルで一家をたてるつもりであった。その後舟便を待ってなお二ヶ月間ライデンで詩作をしたり、詩稿を整理したりしていたが、3月7日同地を発って、20日にハムブルクに到着した。だが長途の労苦は余りにも重かった。3月27日病に倒れ、翌日死を予感して自分の墓碑銘を書き、オレアーリウスに詩稿を托し、1640年4月2日その数奇な一生を閉じた。享年卅才と6ヶ月であった。

IV

以上の経緯は Adam Olearius がその後1647年に公刊して非常なセンセーションを巻き起した波斯紀行 *Offt beehrte Beschreibung Der Newen Orientalischen Reise So durch Gelegenheit einer Holsteinischen Legation an den Koenig in Persien geschehen.* (erweiterte Neuauflage, 1656) 並びにオレアーリウスが夭折した詩人の遺志によって1641年に刊行した五十六篇を収めた詩集 *Poetischer Gedichte Prodromus (Vorläufer)* と1642年出版したオクターヴ版670頁の *D. Flemings teütsche Poemata* を通じて知られる事実の概略であるが、このオレアーリウスの波斯紀行とフレーミンクのドイツ語詩集は、当時として劃期的冒険であった波斯遠征の各地における事件人文及び自然に関して相互に補足し得る多くの記述を秘蔵している文化史上貴重な文献である。と云うのもこの詩集の中にはフレーミンクが旅の行く先き先きで見聞した地理歴史人文風俗の記述や描写、結婚祝賀詩、社交的即興詩諧謔詩、弔問歌、恋愛詩、宗教歌、思想詩、墓碑銘詩、警句詩、各種の祝祭歌等が歌謡調や頌歌形式 (Odenform) やゾネット形式で歌われ

ており、それらの詩はオレアーリウスの旅行記の中に屢々引用されているからである。

しかもその際彼の詩を特色づけているものは、彼が豪商や貴族と親しく交わり、その恩恵に深く感謝し乍らも、他方素朴な農民や悠久の自然に対して深い愛情と強い共感を示していることである。されば彼は露西亜の民衆生活と大自然とをドイツに紹介した最初の詩人であり、この大衆とともに歩もうとする彼の詩魂こそ、彼の詩業に永遠の生命を与えるものと云うことが出来る。

だがそれのみではない。この詩集は詩人フレーミンクの詩境が一大飛躍を遂げ、全く独自の天地を打開していった足跡を伝えるものとして、ドイツ文学史上特記すべき資料である。

フレーミンクはシモン・ダッハと同じく、彼等の大先輩として終生崇敬していたオーピツの詩論に、真の生命を吹き込んだものと云うことが出来る。既に述べたように、彼の詩精神は *Reval* で開眼した。彼は従来の古典文学や外国のルネッサンス文学の摸倣や応用から全く解放されて、自らの本然の感情を卒直平明に自由に自然にドイツ語で歌い出す真の抒情詩人となった。異郷における深い旅愁、遠い祖国の運命に関する憂慮と悲願、恩人や友人に対する報恩感謝の心、異国の人情風俗、文化、自然から受けた異常な感銘、特に愛人エルザーベを思う情熱は、今にして始めて彼をして真に彼自身の中に宿る天性の抒情的精神を、何物にも捕われることなく純粋に発露せしめるに至ったのである。

更らに特記すべきことは、彼が決して宮廷の御用詩人たることを求めなかったことである。彼は独立独歩の学究、博学の詩人として高い矜持を抱いていた。彼は常に市民的英知を代表する一市井人として、自分の信ずる所を高らかに歌いあげた。彼は市民的詩人の使命は、生れ乍らの王侯貴族のそれに劣らぬ崇高にして名誉あるものであると云うオーピツの説を、一生涯を通じて身を以て堅持し証明した。そしてこの精神から先づ何よりも彼の祖国と新教教義とのための果敢な闘争心が流れ出ているのである。

彼の熱烈な新教精神と祖国愛は早くライプツィヒ時代に詩作された *Roman, Margenis (Anagramma für Germanis)* や *Sonett, Er beklagt die Enderung und Furchtsamkeit itziger Deutschen* 等によっても窺われるが、

そこで彼は母なるドイツが戦乱のために恐ろしい不幸に陥っているにも拘わらず、ザックセン人が無気力にして何等なすところのないのを嘆き、瑞典王グスタフ・アードルフを救国の英雄として、この王に大きな期待を寄せている。それと云うのも彼はこの王によってドイツは統一され、世界に平和の到来することを念願していたからである。勿論フレーミンクは瑞典王の真意を見誤っていた。王は寧ろドイツが統一して強大なることを恐れてこの宗教戦争に介入して来たのであって、その第一の目的はドイツを侵略することであった。

然し乍ら詩人にとっては新教のため、祖国ドイツのため戦うことも重要であったが、それよりも寧ろ国内国外を通じて小さな派閥間の闘争で四分五裂し、民衆が塗炭の苦しみをなめることに堪えられず、国際間や宗派間の相剋を超越した世界の平和、人類の自由を願う心が強かったのである。その結果彼は戦乱のドイツを去って、欧州に真の繁栄と平和を招来するための大冒険旅行に出たのであって、旅行の初期には暫く彼の関心は政治上の情勢から遠ざかっているように見えるが、旅行の途次彼の思索が再び余裕を取り戻して来るや、彼は新たな勇気を以て母国ドイツの平和と自由を祈願せずにはいられなかった。彼は今や波斯との通商貿易に祖国を救う大いなる道を見たのである。彼はホルシュタイン侯が露帝と波斯王と提携して、士耳古に対する一大十字軍を起し、そのためにドイツも全国的に一致してこの十字軍に参加するであろうことを夢見た。

この夢が、かのアードルフ王にかけた期待と同様、如何に空しいものであったかは、この使節団派遣が結局その背後に働いていた列強の政治的野心のために見るも無慙な結果に終った歴史的事実が証明するところであるが、しかもそれは如何に壮大な詩人の夢想であったことであろう。だからこの旅行の壮挙がすべて水泡に帰した時の彼の嘆きは大きかった。彼が1639年7月愛する祖国に帰って来た時は、既に情勢は全く変っていた。ザックセン選帝侯は瑞典王ともに新教擁護のために戦っていたのが、1635年Pragでドイツ皇帝と協定して旧教側に立っていた。瑞典のAxel Oxenstiernaは仏国と結托してドイツ侵略の意図を愈々明かにして来た。今や彼は祖国の危機をよそにして空しく過した青春、遠く海外に逃避していた自らの怠慢を省みて、悔恨の念に堪えないものがあった。ゾネット An

Deutschland は当時の心境を物語って惻惻として人の胸を打つものがある。

だが同時に又この長途の旅は詩人の心境に反省と諦念を通じて徐々に確固たる人格の自覚を齎したことも疑を容れない。彼は前記「ドイツに寄す」の終句で「徳のために戦うものは到るところ住居あり」と歌っているが、こう言った開悟達観は恐く旅中の困苦、特に失恋の体験を通じて既に体得されていたものと思われる。

既に述べた通り、彼は愛人をあとに残して遠い旅に出て以来、無数の詩をエルザーベに送っているが、その心境は第二回目の旅に出た直後、将来の愛の成就に大きな望を托して歌った *Ode, An Basilenen, nachdem er von ihr gereiset war* (1636, 3, Basilene は *Ilisabe* の *Akrostichon*) から始まって、その愛が拒まれた時の哀切極まりない嘆き、*An Seine Boten; Sehnsucht nach Elsgen* 等の *Oden* を経て、やがて世の無常観を克暇し積極的肯定的諦観に達し「オー運命のさだめのままに快く従うものこそ幸なれ」と歌った *Ode, Entsagung* に到る恋愛詩の中に、凡ゆる虚飾を振り払った赤裸々にして清純な告白となってなり響いている。実にこうして熱血の詩人フレーミンクは苦悩の中から悟りの境地を打開していった。ゾネット *An sich* (1636) はその心境を最もよく伝えている。

An Sich

Sey dennoch unverzagt. Gieb dennoch unverlohren.
Weich keinem Glücke nicht. Steh' höher als der Neid,
Vergnüge dich an dir und acht es für kein Leid,
Hat sich gleich wider dich Glück', Ort und Zeit verschworen.

Was dich betrübt und labt, halt alles für erkohren.
Nim dein Verhängnüß an. Laß' alles unbereut.
Thu, was gethan muß seyn, und eh man dirs gebeut.
Was du noch hoffen kanst, das wird noch stets gebohren.

Was klagt, was lobt man doch? Sein Unglück und sein Glücke
Ist ihm ein jeder sellbst. Schau alle Sachen an.

Diß alles ist in dir, laß deinen eitlen Wahn,
Und eh du förder gehst, so geh' in dich zurücke.
Wer sein selbst Meister ist und sich beherrschen kan,
Dem ist die weite Welt und alles unterthan.

(大意。自戒。されど恐るる勿れ。されど見捨てる勿れ。不運に負くる勿れ。妬みを超越せよ。自らに足ることを知りて、運や時や所が結托して背くとも、それを苦痛と思う勿れ。汝を悲しませ喜ばせるものは、悉くこれ選ばれたるものと思え。汝の宿命を受け入れよ。何事も悔ゆること勿れ。命ぜられる前に、汝のなすべきことをなせ。汝の望むことの出来るものは必ずや生れいつるならん。何故に嘆き何故に称えるや？不幸も幸福もその元はすべて各人自身にあり。すべてのものを熟視せよ。すべてのものは汝の中にあり。汝の空しき迷を捨てよ。そして前へ進む前に、汝の心を顧みよ、自らを御し自らを支配するものにこそ、広い世界も物皆も従うなり。)

正しく詩人は人生の最も悲惨な不幸に幾度も傷つき倒れ乍ら、その度に精魂をつくして自らの力で自らの安住の地を求めて立ちあがった。そしてすべて外界に存在するもの、時の流れの中に生起するものは変転極まりないもので、頼るものは只一つわが心の中にあることを知った。只一つ徳に専念するわが心こそ神に通ずる道であり、恒常不変の生命を享受することの出来るものである。即ち彼は歌って云う。「徳こそわが命なり」(Vgl. Ode, Tugend ist mein Leben) と。まことに彼の敏感な肉体は苛酷なる現実に倒れたけれども、彼の強靱な詩魂は不朽の生命に輝いている。

附記 波斯貿易使節団後日物語。使節団は1639年7月30日に Gottorp に帰って来たが、旅行中既に副団長 Otto Brüggemann と衝突していた Adam Olearius はそれより一足先きに単独で4月15日に帰り、副団長の不正と横暴を宮廷に訴えておったので、ブリュッゲマンは帰国すると直ちに査問に附せられた。彼の報告書及び決算書は嚴重に審査され、刑事裁判の結果彼は越権行為、親書の開封、文書の偽造、虚偽の報告、公金の使用等の罪状で1640年5月5日死刑に処せられた。

だが抑々この東方旅行の背後には国際的一大陰謀が隠されていたのであ

る。元来小国のホルシュタイン侯が単独でこの莫大な人員と費用を要する大事業を引受けることは到底不可能なことであった。侯はドイツ皇帝の力を借りて瑞典に対抗しようとし、又ドイツ皇帝はハープスブルク家の系統をひく西班牙王と協力して新教徒に対抗していた。然るに西班牙はまた和蘭と政治上経済上宗教上仇敵の間柄であった。かくて西班牙は和蘭の勢力を、又ドイツ皇帝は瑞典の勢力を挫くために、密にホルシュタイン侯を手先にし、露国を通じて東方貿易の道を開き、それによって和蘭の商業権を制圧するとともに、瑞典を西班牙の艦隊と丁抹の陸軍で占領する筈であった。然るに1639年10月西班牙の艦隊はまだ北海に達しないうちに和蘭の提督 Maarten Harpertzoon Tromp によって壊滅的打撃を受け、凡ゆる計画が齟齬して来た。ドイツも西班牙も丁抹もこの遠征隊から手を引き、ホルシュタイン侯は全く孤立するに至って、露国及び波斯に対し商取引上破産者の立場に立った。そのためホルシュタイン侯は全ての責任をブリュッゲマンに被せ、彼を極刑に処して露国及び波斯に契約破棄の口実にせざるをえなかった。勿論ブリュッゲマン自身にも反逆行為があった。彼は密にハムブルクのハンザ同盟を再興しようと企画していたのである。(Vgl. Geschichte der deutschen Literatur, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin, 5.B.S.198f.)

昭和41年 8月28日稿

Paul Fleming und seine Persienreise

Teizaburo UCHIYAMA

So wie das wechselvolle Leben des Schlesiens Martin Opitz (1597-1639) gewissermaßen als eine typische Ausprägung des Schicksals der bürgerlich-höfischen Dichter in der ersten Hälfte des 17. Jahrhunderts betrachtet werden kann, so haben seine Werke, namentlich seine Poetik, Buch von der deutschen Poeterey, einen unermeßlich großen Einfluß auf die damalige deutsche Literatur ausgeübt.

Freilich erlitten in dieser Zeit des Kriegswirrens fast alle kulturellen Bewegungen einen Schweren Verfall, aber umso eifriger und ernsthafter bestrebten sich wenigstens die aufgeklärten Gelehrten und Gebildeten, mitten in den furchtbaren Leiden, ihren individuellen und sozialen Beruf gewissenhaft zu erfüllen und brachten ihre inbrünstige Sehnsucht nach der Erlösung aus der Qual des Lebens zum Ausdruck. Da waren es vor allem die Dichter aus der bürgerlichen Schicht, die sich diesem Bestreben ergaben.

Schon in den ersten Jahrzehnten des Jahrhunderts bekundete sich der Durchbruch dieser neuen Gesinnung und Stimmung in den Gedichtsammlungen des Bauernsohns Theobald Hoeck aus der Rheinpfalz, der später in Prag und Krumau höfische Dienste fand, oder des Beamtensohns Georg Rudolf Weckherlin aus Stuttgart, der nachher in London eine glänzende Karriere machte. Dann während des unheilvollen Kriegs bemühten sich viele Dichtergruppen um eine neue deutsche Lyrik, die alle Opitz als Vorbild ihrer dichterischen Tätigkeiten verehrten und rühmten, und sich ihrerseits auch um eine neue Lebens- und Dichtungsweise rangen. Dazu gehören der Königsberger Dichterkreis, der sich die „Kürbishütte“ nannte, und dessen Hauptvertreter Simon Dach (1605-1659) war, und die erste Schlesische Dichterschule, in der Friedrich von Logan (1604-1655) als hervorragender Epigrammatiker wirkte. Auch einer der Leipziger Opitzennachfolger, Paul

Fleming (1609-1640) ging, aus der Opitzschen Bewegung herausgewachsen, so selbständig seinen eigenen Weg und hinterließ, wie Dack und Logau, einen unsterblichen Namen in der Geschichte der deutschen Literatur.

In dieser kleinen Abhandlung wird auseinandergesetzt, wie sich Paul Flemings abenteuerliches Leben verlief und welche eigentümliche Bedeutung seine Dichtung in der Literaturgeschichte hat.